

コリントの信徒への手紙Ⅰ 3章1-9節 「成長させてくださる神」

コリント教会は、分裂の危機にありました。そこでパウロはこの手紙を書き、「信仰によって一致すること」の重要性を伝えようとしたのです。「信仰の成長」について、パウロは1-2節で「コリント教会の人々の信仰は、乳飲み子のような状態に留まっていて成長していない」と伝えています。あの時から何も成長していない、と。さらにはパウロ派、アポロ派と派閥争いをして、本当に仕える方が誰であるのかを見失っていたのです。パウロにとってコリント教会は、自分が生んだ子どものようなものです。その子どもが過ちに陥っている。それをパウロは、「まだ成長が足りない」と、愛をもって諭しているのです。さらにコリント教会の人々が、自分たちは一人前だと勘違いしないようにと伝えました。優れた指導者と結びつくことで信仰を成長させることができると考える人々に対し、パウロは5節で伝えます。「何者か」とは、「誰か」を問うものではなく、「何か」という問いです。つまりパウロやアポロがどのような人物であるか、ということではなくて、彼らとはそもそも何なのか、その本質を問うているのです。その答えは「あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者」です。「仕えた者」の原語はディアコノスという言葉で、奉仕者という意味です。あなたがたが言っているパウロやアポロは、「奉仕者」に過ぎない。しかもその奉仕自体が、「主がお与えになった分に応じて」なされたものだ。パウロには植えるという働きが、アポロには水を注ぐという働きが、それぞれ主から与えられ、その与えられた奉仕をしたに過ぎない、そのような奉仕を主が用いて下さって、主ご自身があなたがたを成長させて下さったのだ。パウロはここで、信仰はどのようにして成長するのかを深く見つめています。それは、ある指導者、奉仕者と結びつくことによってではなく、その奉仕者を用いて信仰を与え、成長させて下さる主なる神さまによってなのだ、と。

信仰を成長させて下さるのは神である。それは、自分で自分の信仰を成長させていくのではない、ということです。コリント教会の人々の陥った間違いはそこにありました。主イエス・キリストを信じる信仰は、本来、それによって自分を向上させ、より立派な者になる、というものではないのです。立派でも優れてもいない私たちが、ただ神さまの憐れみと恵みによって、主イエス・キリストの十字架と復活によって罪を赦され、神さまの祝福にあずかる神の民とされる、ということです。つまり信仰の成長とは、私たちの働きが大きく立派になっていくことではなくて、神さまが私たちの内でして下さるその働きが大きくなっていくことなのです。神さまが、様々な奉仕者を用いて御言葉を伝え、このキリストの福音を示して下さることにより、私たちの信仰は植えられ、養われ、成長していきます。この「成長させて下さる神」の働きに気付くことによって、そしてその下に立ち続けることによって、私たちは、信仰によって自分がより優れた者になるという錯覚から救われます。信仰の成長が妨げられず、神さまと共に歩むことが出来ますように。